

# 「春の訪れ」

高山第2組 西蓮寺衆徒 上清水 信男

春三月、わが家の畑のあぜには色とりどりの水仙が芽吹きだしました。亡き義母が元気な頃、毎年少しずつ株分けし増やしてきました。

水仙の花が咲くころ、義母のことが思い出されます。(わが家では、義母の命日を『水仙忌』と呼びます。) 義母は十八才で嫁として迎えられ、七十八才で亡くなりました。二十九才で戦争未亡人と言われ、二人の娘を育てました。

若い頃に習った裁縫が着物を仕立てる技術となり、一家の生活を支えてきました。舅、姑に仕え、朝早くから、日の暮れるまで農作業に従事し、家族の夕食が済めば預かった着物の仕立て、毎日、毎夜、働いてきたに違いない。そんな義母がどんな想いで水仙を増やし、見てきたのだろう。

水仙の花言葉は「希望」・「尊敬」、黄色い花は「もう一度愛して欲しい」・「私のもとへ帰って」と言うらしい。義母はそれを知っていたのだろうか。

これ迄も、今も、正義という名のもとに戦争に巻き込まれ、今この瞬間に世界中のあらゆる人が自由を奪われ、我が身を失っている。

たとい大千世界に

みてらん火をもすぎゆきて

仏の御名をきくひとは

ながく不退にかなうなり (浄土和讃)

私の世界は火で燃えさかかっており、その中で痛ましくも焼かれている。

水仙忌に想うことです。